

写真：機械工学科4年 西濱 光琳「鳴門の新名所」

	1. 生みの苦しみ	2
	2. 本にまつわるエッセイ《高松》	3
	3. 文芸コンクール入賞結果発表《詫間》	8
	4. 講評	8
	5. 入賞作品紹介	10
	文芸評論 【グランプリ】	通信ネットワーク工学科5年 音島 立哉
	短歌 【最優秀賞】	1年2組 金森隆太郎
	俳句 【最優秀賞】	情報工学科2年 宮崎 優奈
	写真 【最優秀賞】	1年2組 今井 菜乃
	写真 【優秀賞】	通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大
	写真 【優秀賞】	通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大
写真 【優秀賞】	1年3組 坂口 裕哉	
6. 教員・学生による推薦図書 全20編（教員9編、学生11編）	12	
7. 教員によるエッセイ	詫間キャンパス一般教育科 田村 昌己… 15	
8. 図書委員長より	16	
9. 専攻科生より	17	
10. ビブリオバトル紹介・ブックハンティング紹介	18	
11. 図書館からのお知らせ	18	

生みの苦しみ

詫間キャンパス
図書館長 一色 弘三



図書館は居場所の一つ

学生時代に図書館には大変世話になった。感謝する一方で、ほんの少しだけ切ない思いもある。大学に編入学をした最初の一年目は大変苦勞した。一般教養の科目と学科専門の科目の授業に行ったり来たりで、すでに一般教養の科目取得を終えているクラスの者とは週に数回の授業でしか顔を合わさないため、謎の転校生扱いで、クラスになじむことはたやすくなかった。幸い、下宿の住人とは、一緒にスタジオに入ったり、学内のソフトボール大会に出場したり仲良くできたので、まったく孤独というのではなかった。しかし、クラスで話し相手がいないのはなかなか厳しいものである。クラスでの居心地が悪く、大学および日常の生活での居場所を探すことになる。そのような状況での居場所として図書館はもってこいであった。当時住んでいた下宿が学裏すぐであり、大学図書館に近かったせいでよく通ったと記憶する。クラスにいと勝手な疎外感を感じるようになるが、図書館では1人で読書をしていても調べ物をしていても、実験レポート書きをしていても、周りの目が気にならず疎外感は薄まる。図書館の存在はありがたかった。図書館は居場所を提供する貴重な施設、役割を担うことを実感した。ちなみに、閲覧室だけではなく書庫にもよく入った。何か興味を引く古い図書はないものかという、今考えればよくわからない理由で書庫の中を徘徊したものである。

きっかけは共通キーワード

研究室に配属されると、状況は一変する。別講座の編入生の先輩院生からは、「おまえ、過ぎる！研究室メンバーになじみ過ぎているぞ。編入生らしくない。」と言われる状態になった。それに伴い、相変わらず実験レポートなどの調べ物で図書館へ通うものの、その回数は減ったように思う。

研究室での本に関する記憶に残るエピソードがある。私を含めて後に大学院に進学する3人それぞれが、どういふことか時を同じくして、同じ作者の異なる小説を読んでいたということがあった。Aくんは「油売りの成り上がっていく様がすごい。面白すぎる！」とそのあらすじを興奮気味に説明してくれる。通常、バイクで通学しているBちゃんは、その小説でのセリフ「どうして歩かぬのじゃ」をいたく気に入って、バイク通学を止め徒歩で通学し始めた。その状態がしばらく続くことになる。私の推しはというと、主人公に思いを寄せる女性が主人公に認めてもらいたいがために学問に励んできたと告白する場面でのやりとりであった。その告白に対して主人公は、「学問は、誰彼のためにするというものではない、無償の衝動である。」と自分の気持ちを偽り断るのである。ハードボイルドで不器用な対応にしびれた。歴史小説という共通キーワードが互いに交流関係を深めるきっかけとなった。ちなみに上の3つの小説はいずれもNHK大河ドラマになっている。生き方・身の処し方は歴史から学

ぶものである。

図書館とパンデミック

ところで、100年前のパンデミック（スペイン風邪流行）では終息するまで3年を要したようである。今回の2020年頭からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）についてはすでに3年が経過しているが、未だ収束のフェーズにも至っていない。この間、社会生活は大きな影響を受け、これまでの生活様式とは異なる対応が求められた。図書館もしかりである。感染拡大の防止のため、三密（密集、密接、密閉）を避ける必要があり、閉館や利用制限などの対応が取られた。現在では制限が緩和されているものの依然として、接触や飛沫による感染に注意を払うため、図書館入り口には消毒液を設置し、オープンラウンジにはアクリルボードを設置するなど対応が引き続き行われている。コロナ前に比較すると諸々の不自由さを伴う利用制限がなされることとなる。このような対応は心理的障壁となり、図書館に実際に通う学生が減少することにつながっていく。詫間キャンパスでは、令和3年度の貸出冊数がコロナ前の7割程度であるという現実がある。

一方、コロナの影響で遠隔授業が当たり前に行われるようになってくると、学生はオンラインによる学習、研究の仕方を習熟することになり、オンラインのある利便性の高さを感じ取る。実際に図書館へ足を運ばなくてもネット空間に落ちている種々の有益な情報やコンテンツを効率良く検索でき時間に制限されることなくアクセスできるからである。箱物としての図書館は存在意義が危うくなる。

ポストパンデミック、どうする図書館

近年では、図書の所蔵という役割だけではなく地域の方々交流の場を提供するという役割に重きを置く図書館がある。集客力を上げていくわけである。そのような方針のある図書館は特に、ウィズコロナ期では賑わいによる感染拡大が起こらないよう苦しい対応に迫られた。感染予防対策を講じつつ工夫を凝らした運営に腐心することになる。

利用者は感染予防対策として図書館に通うことを控える。図書館は集客が落ち貸出冊数が減少する。そのことは、利用者および図書館双方に、デジタルコンテンツサービスの環境充実を更に進めるべきであるという気づきを与える。本校図書館についても同じ思いであるものの、デジタルコンテンツの保護と利用に関する法的問題、サービスの仕組み、予算面の問題などがあり、その実現には難しい課題がある。

電子図書館のようなサービスの提供も期待されるが、そうはいっても学校の図書館としてはやはり学生に実際に足を運んで来館してもらいたい。入館者数の向上のためには、コロナで一旦離れた利用者呼び戻しつつ、新たな利用者の開拓も試みる必要がある。そのためには、学生の興味を惹くイベントを催すことが考えられる。高松キャンパスで開催しているプブリオバトルは、学生の図書への関心を高めるために有効である。学生の実利となるようなイベント、例えば、学習、就職、進学で役立つ参考書を先輩から後輩に向けて紹介プレゼンする会も教務やキャリアサポートセンターといった部署と協力して行えると考える。

閲覧室の机に図書を平積みして学生が調べ物や自習している頼もしい姿があちこちで見られるとうれしいものである。早くコロナが終息し、コロナ期の不自由な制限がなく、学生が図書館で読書やグループワークなどに取り組めるような状況に戻ることを期待する。

本にまつわるエッセイ

〈高松キャンパス〉

教職員

『人間失格』の外側

一般教育科 野口 尚志

太宰治の『人間失格』（1948年）は発売から70年以上もベストセラーであり続けている。今や韓国、中国（舞台劇にもなった）、なぜかアメリカでもよく売れている（太宰のキャラが登場するアニメ経由と推測）。多くの読者はこの作品を読んで内容に戸惑い、たぶんネットで検索して、作者が自分の経験を書いたという情報を見つけてほっとする。自分の理解できる枠組に当てはめて安心しようとするのだ。しかし、たとえ実体験が書かれていても、作品は何かを訴えかけているはずである。

現在、「私小説」とは、ジャンルではなく、読者の読みのモードのことであるとされている。つまり、〈作者がまるで自分のことを書いているかのように読ませる小説〉が私小説である。だから、作者が自分のことを書いているように見えても、そこには作者のつくった設定や誇張や創作が——つまり嘘が、たくさん入っている。太宰は小説とは読者へのサービスだとまで述べている。ではこの作品、どう「小説」に仕立てられているのだろうか。

太宰が作中に「人間失格」という語を初めて用いたのは「俗天使」（1939年）という短編だろう。

私は、弱行の男である。私は、御機嫌悪いである。私は、鳥でもない。けものでもない。そうして、人でもない。きょうは、十一月十三日である。四年まえのこの日に、私は或る不吉な病院から出ることを許された。（中略）あこのころの事は、これから五、六年経って、もすこし落ちつけるようになったら、たんねんに、ゆっくり書いてみるつもりである。「人間失格」という題にするつもりである。

この「病院」とは、今よりずっと偏見の激しかった当時の精神病院で、太宰は薬物依存症の治療のために入院したのである。だが、「人」でない理由はそれだけではない。1939年といえば、日中戦争の最中である。徴兵検査に甲種または乙種合格した「健康」な体で戦地に出征する。これこそが当時の理想的な、最も〈男らしい〉男性の姿であった。他方で、そうなれない人もいた。戦争がもたらすジェンダーの動揺がこ

の引用にも表れているのだ。

そんな時代に、作家はどんな存在だったのだろうか。菊池寛や林芙美子や吉川英治ら多くの作家は戦場に行って日本の戦争や軍隊を称賛する文章を書いた。そうしなければ、作家など非常時の無用物とされてしまうからである。太宰は従軍作家に名を連ねていない。無用な存在であり続けた。このように当時の太宰は、「普通」「正常」から二重に疎外されていた。

戦後に長編小説『人間失格』となる発想はそんな時期に生まれている。しかし、そうした位置にいることは、作家としてそれほど悪くはない。疎外されているということは、真ん中にいる「正常」で「健康」な人たちの嘘や暴力性がよく見えるということだ。主人公が自分を「人間失格」と思うこと自体が、「正常」の側への問題提起である。だいいちこの作品、全体を読めば彼のことを「人間失格」などとは決して言っていないことがわかるだろう。この点がこの小説の要である。読者の多くは、主人公を見ているつもりで、彼に見られているのかもしれない。

小説を読、研究する。

一般教育科 森下 二郎

私は小説があまり好きではない。アメリカ文学研究者なのだ。だが研究対象として小説を読み解くことほど私に充実を与えてくれるものはない。私のこの小説に関する転換は三浦玲一先生によってもたらされた。三浦先生は元一橋大学の教授で文学を社会（政治・経済・文化）と照らし合わせ読んでいく。これは小説内の美学に着目する新批評と呼ばれる古典的な文学研究とは一線を画するものであり、カルチュラル・スタディーズと呼ばれるこの方法論は文学研究において亜種とみなされる。しかしながら、私は三浦先生を通じて「文学が如何にその時代との関係性で存在しているか」を知り、文学の社会的意義に魅了され、結果として文学研究を生業とするに至ったのである。

私の契機となったのは、学部時代に出会った三浦先生の二つのご論考で、1つ目は『文学研究のマニフェスト』（2012）に収録されているJ・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』（1951）を冷戦自由主義的に読解するもの、2つ目は『文化と社会を読む 批評キーワード辞典』（2013）の中にある「リスク」という項目において、『インデペンデンス・デイ』（1996）、『アルマゲドン』（1998）という九十年

代に流行したディザスター映画をリスク社会を背景に分析するものである。前者は主人公ホールデン・コールフィールドの語りが精神病棟からなされていることに着目し、個人の権利や自由（そしてそれに付随する自己責任）に固執する冷戦自由主義はそれを内在化した主体から歴史的・社会的想像力を排除し、最終的にその「無垢」な人物を狂わせると論じ、後者は双方の映画のエンディングが象徴するような「勝ち組」讚美は、その足元には無数の「負け組」が転がっているというリスク社会の不都合な真実を無視することによってのみ成立すると述べている。どちらの論文も新自由主義との関連において論じられており、この新自由主義というキーワードは私の漠然としていた現代社会に対する問題意識を分析する手がかりを与えてくれた。ここで強調したいのは、この知識の重要性が文学テキストを媒介に私へと伝わったことだ。

残念ながら、三浦先生は2013年に47歳で夭折されている。しかし、三浦先生の明瞭でありながらも深遠なご論考は今もなお多くの人に影響を与えつづけている。専修大学の河野真太郎先生もその一人であり、河野先生の近著でポスト・フェミニズムとその影響下における新しい男性性のあり方を模索した『新しい声を聞くほくたち』（2022）を読んだが、三浦先生の作品かと勘違いしそうになった。もちろん私も三浦先生と対話しながら、文学と社会の相関的な関係性を研究し続けるつもりだ。

人生の道しるべとなった本

学務課 三谷 雅恵

「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記第1章1節）

友人に勧められて初めて聖書を手にしたのは慣れない子育てが始まった頃、読みたい気持ちが沸き上がりすぐに書店で買い求めた。興味津々で1ページ目を開くと、先の言葉が目に飛び込んできた。えっそうなの??とただただ衝撃的だった。

「神は、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。・神である主は、土地のちりて人を形作り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は生き物となった。・神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れてこられた。」

生物の授業で染色体を習った時、何で男はxyなの

に女はxxでyがないの?と疑問だったのだが、その理由はこれだったのだと妙に納得し腑に落ちたような気がした。

聖書は、イエス・キリストの誕生を境として旧約聖書39巻と新約聖書27巻に分かれていて66巻の書が1冊にまとめられている。ちなみに九九の $3 \times 9 = 27$ 、 $39 + 27 = 66$ で覚えるといいよと教わった。

旧約聖書は、神の天地創造、アダムとイブ、彼らの罪、ノアの箱舟、バベルの塔、モーセの十戒、ダビデやソロモンといった王の記録等、多くの人が絵画等で見たり聞いたりしたことのある話が記されている。

新約聖書は、キリストの弟子となった人々の証言（福音書）と数々の手紙、黙示録からなり、キリストの誕生（世界中がお祝いするクリスマス）に始まり、十字架刑につけられるまでの3年余りの間に人々に語った言葉と行った奇跡等が記されている。

豚に真珠、狭い門から入れ、目から鱗が落ちる、等の言葉が、聖書から引用されたものだと知り、正に目から鱗だった。

当初は、フィクション物語としか思えなかったが、聖書を深く学ぶようになって、作り話ではなく歴史書であり人の生き方の書であると確信させられた。

次の言葉が問いかけてきた。「さばいてはいけません。」「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。」そして教えられた。「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」自分の力では到底できない。でも、今も失敗を繰り返しながら、聖書の言葉を道しるべに日々前を向き感謝して過ごせている。

誰も、好きな音楽や本に元気をもらうことがある。聖書には多くの訓戒、慰め、励ましの言葉が満ちていて、人生の目的を教えてくれる。そして、誰もがありのままの姿で愛されているんだよと語りかける。「あなたは正しすぎではならない。自分を知恵のありすぎる者としてはならない。」「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」「わたしの目には、あなたは高価で尊い。」「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのところに來なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

世界中で桁違いのベストセラー本である聖書に、ぜひ多くの方に触れていただきたい。無料アプリ「聴くドラマ聖書」をお勧めする。

※ゲーテ（ドイツの詩人・劇作家・小説家・科学者（1749～1832））

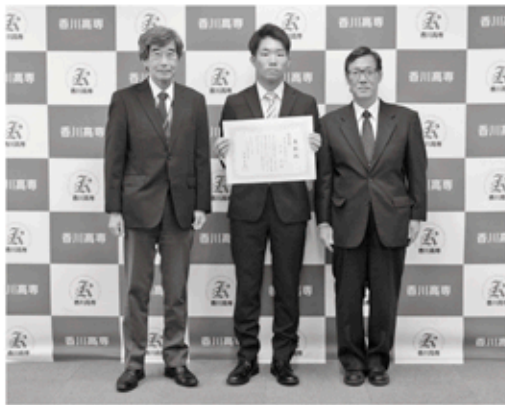
『私が獄につながれ、ただ一冊の本を持ち込むことを許されるとしたら 私は聖書を選ぶ。』

学 生

高松キャンパス図書館が主催して募集した「本にまつわるエッセイ」優秀賞の表彰式を、11月9日(水)に実施しました。

表彰式では、優秀賞を受賞した学生に、田中校長から賞状と記念品が授与されました。

優秀賞 創造工学専攻1年 山下 至さん
「本が読めない。」



応募作品紹介 ※掲載は、学年順の50音順

絵で伝える・考える

創造工学専攻2年 上高 正寛

研究活動において、会議や打ち合わせは必須と書いていいでしょう。会議や打ち合わせ後には内容を取りまとめた議事録を作成されると思います。その議事録は、出席者の発言や意図を明示して合意形成を図るといった役割があります。また、出席できなかった人に対して情報共有をするという役割も担うことができます。この時、当該研究に関する知識レベルが同じかそれ以上の人でなければ、会議内容の本質を理解できない恐れがあります。例えば、研究の背景や目的に関する打ち合わせの内容に関して、研究メンバー以外の人に理解してほしいというシーンです。当事者間ではある程度の事前の情報の共有があり、打ち合わせ内では専門用語が多発してもお互いに理解ができる前提で話が進みます。しかし、これらの内容について低学年への研究紹介や後輩への引継ぎなどでは、これらの情報をそのまま提供するだけではイメージが全く伝わらず、理解されない恐れがあります。私はそうした状況に陥った経

験が多くあります。この問題を解決する方法はないものかと悩んでいました。

悩みながらふらっと立ち寄った図書館で「はじめてのグラフィックレコーディング」という本を見つけました。みなさんはグラフィックレコーディングという言葉を知っていますでしょうか。グラフィックレコーディングとは、会議などでの議論をリアルタイムで可視化する手法のことです。この手法には、認識の共有や問題の発見などのコミュニケーションへの発展を促す効果があります。私は、以前グラフィックレコーディングのセミナーに参加したことがあります。概要だけ見るとものすごく簡単なことのように思いましたが、実際に説明を受けてみると、発言の意図や感情を汲み取る、議題の本質を外さない、専門用語を使わない、会議のストーリーを絵で示すなどの独自の難しさがあると知りました。しかし、この技術を身に付け絵でイメージを補完しながら情報共有をすることで、上記のような悩みは解決できるのではないかと考えています。今現在私はこのスキルを身に付けようとしているところです。

また、この手法の基礎であるビジュアルシンキングは、思考力、コミュニケーション力、創造力を向上させる効果があります。認識した内容を解釈し、齟齬なく絵を交えて伝える一連のプロセスを繰り返すことで、これらの能力が磨かれ、説明力も向上することでしょう。これらの力は、学生生活や社会人生活において欠かせない必須の力ですので、これをきっかけに皆さんの日々の活動にもぜひ取り入れてみてはいかがでしょうか。

幸せな人生のために必要なもの

創造工学専攻2年 森 悠輔

幸せな人生を送るためにはどうしたらいいだろう。金？地位？愛？とりあえずよくわからないがみんな誰しも考えることである。ちなみに、ある研究によると幸福度の高い人間は、仲の良い友人がいる人らしい。それはさておき、(今より幸せになろうという話において友人には困っておらず、現状で満足していないため)自分なりにどういう生活を送ることで幸せに近づけるか考えた。そこで思いついたのが、無駄な時間の削減だ。人間1日のスケジュールを細かく管理している人は少なく、ほとんどの人は何をしていたかよくわかっていないグレーな時間がかなりある。その中でも代表的なものがスマホをいじ

る時間だが、その時間を減らしたところで大抵は他の事（テレビ、ゲーム等）に時間を使ってしまい、結果的にグレーな時間は無くならない。また、人間にはグレーな時間、すなわち息抜きをする時間が必要だという意見も確かに存在する。そこで、人間にとって仕事や生命維持活動とは違う「人間が自由時間に好んで習慣的に繰り返し行う行為」である趣味にフォーカスしたいと思う。

趣味の中にはゲーム、旅行、筋トレ等、人それぞれでさまざまな種類がある。その中でも時間を有意義に使うことができ、息抜きもすることができる最大公約数はなんだろう。そう考えたときに自分が出した結論がそう、読書である。読書といっても本の種類はたくさんあり、当然読む価値は本によってさまざまである。ここでは、自分が読んできた本で特に価値の高かった本を紹介しようと思う。

どんな人にも是非薦めたい本はカーネギーの『人を動かす』である。本書はいわゆる自己啓発本、読んでためになった気になり一瞬だけやる気が起こる無意味本に分類されるが、安心してほしい。『人を動かす』は自己啓発本の原点にして頂点であり、むしろ自己啓発本という括りでは失礼なくらい別物である。どういった本かは実際に読んで理解してほしいのだが、わかりやすくいうと「実践的なハウツー本」である。本書の何がすごいかというと、人間関係におけるさまざまな術を実話をもとに具体的に説明しており、誰でも簡単に試せるという点である。そして、その内容を目次により簡潔にまとめているのだ。これ以上の説明は自分にはおこがましいので割愛させていただく。内容を知らなければ、何度も言うが、実際に読んでほしい。今までたくさんの有意義な本に出会ってきたが、なぜ本書を特に薦めるのかというと、最初の問いの答えが一番近いと感じたからだ。結局、金も地位も愛もそして友人も、『人を動かす』をどれだけ使えたかで決まるということに。

ここまで長々と語ってきたがそんな自分も大層な人間では決してなく、時間にはルーズで口先だけの不勉強野郎なわけだから、直さなければいけないことも足りない知識もたくさんあるけれども、『人を動かす』のような名著と出会い、それを活かすことで悔いのない幸せな人生を送りたいと思う。

ものがたりのおわり

創造工学専攻1年 西岡 一樹

ものがたり、一般的に小説に分類されるようなお話には、起承転結でいうところのおわりが必ず存在していることと思う。複数巻に亘るような長期連載のお話であっても、最終巻ではそのおわりは必ず訪れることだろう。世の中に無数に存在している物語の中でも、私にはどちらかというとバッドエンドに分類されるようなものが好ましく感じられるのだ。全体が陰鬱なものや重苦しいものが良いというただマイナスの要素を望んでいるのではなく、例えるなら、主人公が終盤に仲間たちの思いで強化されて勝利しハッピーエンドとはならず、努力した結果として訪れる事実としてのバッドエンドに惹かれるのだ。かといって普通の心地よく終わる物語が嫌いなわけではないし、昔はそっちのお話の方が好きだったと記憶している。主人公が苦戦していればイライラさせられていたと思うし、メンバーが欠けたとすれば嫌な気持ちにもなっていた。そのまま、事態が劇的に改善されるようなことがなければ、面白くないお話であったと考えながら本を閉じていた。しかし、その感じ方を変えられる本に出会った。それは湊かなえさんの「少女」というお話である。この本の内容について詳しく解説はしないが、簡単に言うと冒頭がだれかの遺書の読み上げから始まり、死というものを題材として二人の少女が歩んでいく物語である。そして、この物語の何が私を引き付けたのかというと、物語の終盤では二人の少女はそれぞれ問題を解決したかのようにみえてハッピーエンドで終わると思わされるのだが、最後のエピローグで遺書の後半部分が読み上げられた際には、とてもそのようには思えなくなったのだ。全体的に明るいお話とは言えないが作者の見せ方が上手かったこともあり、過去の私のように後味が悪いだけの面白くない物語に分類されることはなく、新たな発見に繋がった。ここで言う私にとっての発見は、「おわり」とは登場人物たちにとって最良な結末が必ず訪れる予定調和的な要素ではなく、時には大切なものを失うこともなるし、エピローグで描かれる物語の少し先の未来では主人公が守りきったものが壊されているかもしれない。不確定であり、確実なのが物語のおわりというものだという事だ。つまり、最後には必ず主人公が勝利するという安心感のもとにお話を読み進めることより、本当に先が読めずに不安の中で作品を読むことに魅力を感じるようになったのだ。ハッピーエンドのお話ばかりを読んでいれば、読了後

に心が暗くなることや、後味が悪いといった思いをせずに済むかもしれないが、それはとても退屈に感じてしまう。バッドエンドは、逆に物語の進行を不鮮明にするが、代わりに自由で不確実な結末を保証してくれる。結末が入り乱れるからこそ、ハッピーエンドのお話はより輝くし、バッドエンドのお話はより深みが増すだろう。そして、後者の場合は、どのような形で結末を迎えるのが特に予想がつかない。ハッピーエンドであれば、物語を読み進めていけば目指すところは伝わってくるので、結末の方向性も自然と想像されるが、バッドエンドであればどの外的要因が結末を定めるのか判別することは困難である。

この不確実性から生み出される不安や恐怖などの様々な感情が振幅を大きくして、それが心地よいので私はバッドエンドと呼ばれる物語が好ましいと感じているのだ。

優秀賞

本が読めない。

創造工学専攻1年 山下 至

「本読んでるんやな。凄いなあ。今日は何を読んでもるんや？」

ふと本を読んでいるとそう聞こえる時がある。

僕はあまり本を読まない、というか読めない。理由は簡単で、文章だけでその物語を想起して楽しむことが苦手だからである。でも本をたくさん読んでいた時期があった。いつからだろうか。あんなに頻繁に図書室に通っていたのは。

きっかけは、祖父の一言だった。

「読書してるんや！すごいやん！」

ただ、ゲームの攻略本を読んでいるだけだった。初めて祖父の家で何かを読んでいた時にそう言われた。流石にこれを「読書」と呼ぶには無理がある。僕はきちんとこれがゲームの攻略本であることを説明した。でも、祖父は、

「本の種類はなんでもええ。ただ文字を読むことが大事なんや。だから立派やで。」

そう言ってくれた。僕はきっと凄く単純なのだろう。ただ褒められたことが素直に嬉しかった。祖父はすごく好きだ。家の近所に住んでいて、生まれた時から毎日会っている。テストの点数が悪い時には親が怖い。そんな時には祖父に助けを求めて、一言言ってもらう。

「そんな怒るな、そんなときもあるって。つぎや、

至。頑張れよ。」

これで解決だ。こうなれば親はこれ以上言っていない。そんな、僕をととても甘やかしてくれて、やさしい祖父を嫌いになるわけがない。

思い出話をしすぎてしまった。話を戻そう。その祖父の一言がきっかけだった。僕が本によく触れるようになったのは。ほぼ毎日のように図書室に通っては本を借り、家に帰って祖父の家で読む。まあ読んでも内容なんかあまり頭に入っていない。何ページか飛ばしながら読んでみているし。それでも構わない。

「本読んでるんやな。凄いなあ。今日は何を読んでもるんや？」

祖父はそう言い、読書していることを褒めてくれる。そして始まる祖父との何気ない会話。本が会話のきっかけになっていたのだと今では思う。いつも畑仕事をしていた祖父。僕は虫が苦手で、畑にはあまり近づけなかった。それもあって昔から話す場所は決まって家。僕は家に帰ってずっとテレビゲームをしている。たまに祖父の顔を見ると、とてもつまらなそうだった。祖父は僕がテレビゲームをしている時は基本話しかけてこない。邪魔をしてはいけない。祖父なりの気遣いであったはずだ。しかし、これを機に話をしている祖父は凄く楽しそうでああ、僕も凄く楽しかった。

友人と遊んだり、課題をしたり。祖父と過ごす時間は年々減っていく。

世間では今はコロナ禍一色。本当に嫌なご時世になってしまった。蝉は鳴き、とても暑い日だった。母が慌てた様子で僕を起こす。寝ぼけていた。何を言っているのかわからない。外から救急車のサイレンが聞こえる。嫌な予感がした。急いで母が向かった先へ行く。祖父の家だった。昨日まで平気そうだった祖父が横になっている。目や吐く息が衰弱きっていた。運ばれる祖父。次の日、祖父は亡くなってしまった。病死だった。祖父は普段、人に弱いところを見せない。弱音を吐かない。そのため発見が遅れてしまったのだった。葬式が始まる。家族や親戚、近所の人が集まり、みんな大泣きだった。僕もあれほど泣いたのは初めてだった。このご時世柄、祖父は袋に入れられていた。身内だから袋を開けて欲しいと頼んだが無理だった。最後までその肌に触れることさえできなかった。

家に帰ると一冊、祖父がよく読んでいた作物の本が置いてあった。そっと手に取る。涙がまた溢れてきた。あの優しく元気な声が聞こえる気がして、振り返ればいつもの場所で座っている気がして。

「本読んでるんやな。凄いなあ。今日は何を読んでもるんや？」

文芸コンクール 入賞結果発表〈詫間キャンパス〉

第7回図書館文芸コンクール入賞者表彰式を、12月7日（水）に詫間キャンパスで実施しました。コロナ対策で密を避けるため、入賞者の出席者は最優秀賞の4名のみとしました。入賞者は以下のとおりです。
（グランプリ・最優秀賞の各1名欠席）



【詫間キャンパス】……………

文芸評論

グランプリ 通信ネットワーク工学科5年 音島 立哉

エッセイ

最優秀賞 1年2組 玉置 梨音

優秀賞 情報工学科2年 浦山 純

小説

最優秀賞 情報工学科3年 中山 広夢

優秀賞 1年3組 古川 陽都

優秀賞 情報工学科2年 奥田 煌音

短歌

最優秀賞 1年2組 金森隆太郎

優秀賞 情報工学科2年 宮崎 優奈

俳句

最優秀賞 1年2組 今井 菜乃

優秀賞 通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大

写真・イラスト

最優秀賞 通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大

優秀賞 1年3組 坂口 裕哉

講評

詫間キャンパス

一般教育科 国語科

図書館文芸コンクールも第6回を迎え、165名からの応募作品が集まった。以下、受賞者を中心として、部門ごとにコメントを付していく。

・文芸評論部門

文芸評論では、異なる二冊の本を取り上げた上で、共通するテーマやそれに対する自分の意見を論じる。自分の感想を綴る読書感想文とは異なるが、応募作品の中には混同してしまっている作品もあった。最

終選考にまで残った作品が少ない中、満場一致で選ばれたものが音島立哉くんの作品であった。「自分らしく生きる」をテーマとして取り出し、現代における多様性社会のあり方を示唆している。本の記述を出発点としながら、SNSの投稿の話題に繋げ、自分の思考へと発展する評論文として完成されていた。論理的な構成がとられ、文章の繋がり滑らかで読みやすい。文芸コンクール全体のグランプリとしてふさわしい作品と評価した。

・エッセイ部門

エッセイは自由度が高いジャンルである。主に自身の経験に基づいた応募作品が多く見受けられたが、制限がないからこそ的確に書き手の思いを伝えるための工夫が必要である。受賞作品として選ばれた作品は、

「文章の中で伝えたいことは何か」が明確であると評価された作品でもある。最優秀賞である玉置梨音さんの作品は、複数のエピソードを用いながら自身の抱えるコンプレックスを明るい文体でまっすぐに訴える。主張が一貫しているため、説得力をもって読み手に語りかける内容の作品として仕上がっている。優秀賞の浦山純君の作品は日常の「猫とふれあう日々」の一コマを切り取った作品である。何の変哲もない一コマであるが、非常にテンポよく語られていくため、読み手を文章の中に引き込む作りになっている。

・小説部門

昨年同様に、小説部門は応募数が非常に多く力作揃いであった。どの作品も世界観の設定の拘りや表現の工夫が施されており、一番の激戦部門と言っても過言ではない。全体の傾向としては、ストーリー展開よりも表現の工夫で魅せようとする作品が多く見受けられた。その中で最優秀賞として、中山広夢くんの作品を選出した。森鷗外の『舞姫』のifストーリーで、原作と内容をリンクさせながらも、作風や文体等も異なる現代小説として仕上げている。二重に文芸の世界を展開することに成功しており、工夫が施された作品として評価した。優秀賞である古川陽都くん、奥田煌音くんの作品はテーマや展開こそ特別なものではないが、語り手の心理表現が非常に優れており没入感のある構成となっている。読み手を引きつける文章としての仕上がりが評価に繋がった。

・短歌部門

短歌部門・俳句部門ともに「動く」がテーマとして設定された。コロナによる制限が緩和されたことによる、再び「動く」年であることを受けてのテーマである。この「動く」意味をどのように捉えるかが作品づくりのポイントとなったことだろう。受賞作品は柔軟な視点をもって「動く」を捉え、作品の中に落とし込むことに成功している。最優秀賞である金森隆太郎くんの作品は、セミの動き、季節の動きという「動く」を二重の意味で捉えることができている。視覚の要素、時間の要素を盛り込むことによって、奥行きのある作品として完成されている。優秀賞である宮崎優奈さんの作品では、数学の問題に取り組む一コマを切り取った。言葉のリズムがよく、耳馴染みのよい

表現に仕上がっており、韻文の利点を生かしたものとなっている。このように短歌は口ずさんだ際の音やリズムも、評価の大きなポイントとなってくる。五・七・五・七・七の定型表現以外に挑戦する場合であっても、この点は心に留めて作品作りに臨んで欲しい。

・俳句部門

「長い文章を書くよりも、手軽に作品ができる」というイメージからであろうが、毎年、俳句の応募数は最も多い。しかし、限られた字数の中で自分の思いを正確に伝えるためには、繰り返しの推敲が求められるジャンルである。五・七・五という限られた文字数の中で、如何に「動く」を描くか。また、適切な語を用いて如何に季節性を示すかが鍵となった。受賞作品はその限られた言葉をもって、情景を鮮やかに切り取ることに成功している。最優秀作品である今井菜乃さんの作品は、言葉を重ねることで、次々と紙を飛ばす扇風機という「動く」世界を作り上げている。爽やかな情景をすぐに頭に浮かべることができる表現として仕上がっている。三谷昇大くんの作品は、蓮畑をテーマとし、佇んでいるのにどこかピンと合わないような蓮の実の不気味さを表現する。その微かなブレも「動く」の一端として、イメージできるものとして評価した。

受賞作品は己の中で表現したいものと向き合い、それぞれが工夫を施した様子が見受けられるものだった。SNSですぐに言葉を発信できる時代であるからこそ、一度自分の表現したいものに向き合う機会は大切である。「読み手に誤解なく伝えるためにはどのようにすればよいのか」という思いは、今回応募を見送った学生も含めて一度考えてもらいたい。この文芸コンクールが一つの機会となり、各自が少しでも文芸の世界に触れ、自身の内なる思いを表現する場となることを国語科としては願っている。



入賞作品紹介

〈読者キャンパス 文芸評論〉

グランプリ

充足感を生きる

通信ネットワーク工学科5年 音島 立哉

自分らしく生きること。それがいかに困難か、現代を生きる私たちはそれを日々痛感して生きている。組織や周囲の人々から求められる「らしさ」を演じ、自分を押し殺して生きている人も多い。そういった現代におけるある種の異常さを指摘するのが本書である。

『Dark Horse』は、20世紀の産業革命に始まった効率化と標準化の流れが現代まで脈々と受け継がれていることを指摘する。このシステムにおいては、標準化されたルートを誰よりも秀でた成績で収めることが能力の証とされてきた。つまり、その裏側にあるのは「一部の人のみに優秀な能力がある」という考え方である。しかし、本書が提示するのは全く新しい考え方である。それは、「すべての人に能力があり、誰もが幸せを追求できる」ということである。この根拠として、多くのダークホース（予想外の勝者）が驚きを持って紹介され、また、彼らのほとんどが充足感を持って幸せに生きていることが示される。

『静かな人の戦略書』は、内向型（おとなしくて引っ込み思案）の人が騒がしい現代においてどのように自分らしく生きていけばよいかを示してくれる。無理に外向型（明るく、誰とでも話せる）になろうとせず、自分の特徴を受け入れ、それをもとに活躍すればよいことを教えてくれるのである。

これら2冊に共通するのは「自分らしく生きる方法」である。現在の社会システムが示す唯一のルートを誰よりも早く辿れば有能、脱落すれば無能といった考え方は結局のところ、自分自身を苦しめているのである。そうではなく、自分自身をよく観察し、内から発生する小さなモチベーションに従って機会を自ら選択し、充足感、つまり幸せを追っていけばよいのである。

私が考える理想郷はこうだ。誰もが自分の充足感

を追い求め、それによって自らだけでなく、他者までも幸せにする。お金を介在せずとも取引が成り立ち、争いごともなく平和。そこで暮らす人はみな楽しく、幸せに日々を送っている。もちろん、現代を生きる多くの人にとってこのような話は「綺麗事だ」と、一笑に付すものであろう。しかし、本書を読んだ私は今、かすかな希望を見出しているのである。

先日、このようなツイートが話題となった。『支援学校の先生が、水遊び好きな子はお皿洗い、並べるのが好きな子はお菓子を箱に詰め合わせる仕事、粘土が好きな子はパンやピザ生地作る仕事の道に行けるよう支援した話何度思い出しても好き。』これはまさに『Dark Horse』で示されている、小さなモチベーションをもとに機会を選択することの大切さを表していると言えるだろう。既存の社会システムや周囲の人々が要求する「らしさ」ではなく、自分の「らしさ」つまり、自らのモチベーションをもとに充足感を得ることが必要なのである。現代の社会システムを生きる多くの人にとってそれは非常に大きな抵抗を伴うものかもしれない。しかし、その挑戦が自らを充足感で満たし、ひいては社会を幸せにするきっかけになると私は信じている。

Dark Horse「好きなことだけで生きる人」が成功する時代

トッド・ローズ オギ・オーガス 株式会社三笠書房

『静かな人』の戦略書：騒がしすぎるこの世界で内向型が静かな力を発揮する法

ジル・チャン 神崎朗子 ダイアモンド社

引用したツイート：

@hattatsumammy、<https://twitter.com/hattatsumammy/status/1574954762197667840>

2022年9月28日

〈説間キャンパス 短歌〉 ●テーマ「動く」

最優秀賞 道端の 夏の終わりの セミ爆弾 脚が閉じれば コオロギが鳴く
1年2組 金森 隆太郎

優秀賞 いつまでも ここに居てよね 進まずに 仲良くなりたい 動くP点
情報工学科2年 宮崎 優奈

〈説間キャンパス 俳句〉 ●テーマ「動く」

最優秀賞 紙飛ばす また紙飛ばす 扇風機
1年2組 今井 菜乃

優秀賞 整然と 揺れる複眼 蓮の実や
通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大

〈説間キャンパス 写真・イラスト〉

最優秀賞 ヤマガラ 通信ネットワーク工学科3年 三谷 昇大



優秀賞 鍋ヶ滝公園 1年3組 坂口 裕哉



教員・学生による推薦図書

※推薦図書は図書館で貸出できます。

教員〈高松〉



わたしは大統領の奴隷だった —ワシントン家から逃げ出した奴隷の物語—

エリカ・アームストロング・ダンバー/
キャサリン・ヴァン・クリーヴ (著)
渋谷 弘子 (訳) (汐文社)

アメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンは、半ば神格化された、アメリカ史上の最も傑出した偉人とされています。ところが、本書が紹介するのは、これまでほとんど語られることのなかった奴隷所有者としてのワシントンという、彼の負の側面です。

「すべての人はその創造主によって平等に創られている」とは、イギリスからの独立を高らかに宣言した「アメリカ独立宣言」(1776年)の有名な言葉ですが、この建国の理念とは矛盾する奴隷制度が独立後も温存されていました。ジョージ・ワシントン自身も、ヴァージニア州の自宅に夫婦で300名近い奴隷を所有していました。本書の主人公オーナ・ジャッジは、このワシントン家の奴隷の一人で、ワシントンの孫娘へ結婚記念品として譲渡されることになった直後に、ワシントンの元から逃亡しました。

ワシントンは、「使用人というよりわが子同然に育て、接してきただけでなく、妻が連れ戻したいと強く望んでいる奴隷の思知らずな行為は、罰を受けずに済ませるべきではない」とオーナの逮捕に執念を燃やしました。しかしながら、オーナはワシントンによる捕獲の試みをかいくぐり、終生捕らえられることはありませんでした。逃亡後の彼女は、奴隷の時よりもきつい仕事に耐えなければなりませんでした。晩年に受けたインタビューの中で逃亡したことを後悔していないかと問われると、「いいえ、わたしは自由の身になれましたし、神の子になれたのですから」と答えています。

「自由の国」を自負するアメリカは、近年のBlack Lives Matter運動が明らかにしたように、深刻な人種差別問題を抱え続けている国でもあります。この矛盾の根源である、建国理念と奴隷制度の関係を考えるうえで、本書は最適の入門書です。

一般教育科教員 奥田 純

図解眠れなくなるほど面白いカラスの話

松原 始 (著) (日本文芸社)

キャンパスの上空を大声で飛び回るカラスに悪い印象を持っている人はぜひ一読して欲しいカラスの入門書です。カラスの生態を図解で面白く解説しています。頭が良い鳥として知られていますが、身近にいる割には声の大きい理由など詳しいことは知らない人が多いのではないかと思います。実践カラス語講座のコラムで鳴き声の意味が解説してあります。本書を読んでカラスの気持ちが少しでも理解できればきっと好きになると思います。

電気情報工学科教員 重田 和弘

だれが原子をみたか

江沢 洋 (著) (岩波現代文庫)

今から120年近く前の1905年は「〇〇の奇跡の年」と呼ばれています。皆さんは〇〇に何が入るかご存知ですか？答えは「アインシュタイン」です。1905年に彼の仕事の中でも重要な論文が発表されました。「光電効果」に関する1編、「特殊相対性理論」に関する2編に加えて発表された論文は「ブラウン運動」に関するものでした。ブラウン運動、化学の授業で名前ぐらいは聞いたことがあると思いますが、彼のブラウン運動に関する理論はなぜ重要なのでしょうか。答えは、それが原子の存在の証明につながったからです。電子顕微鏡もスーパーコンピュータもない時代、科学者達はどうやって「目に見えない」原子の存在を証明したのでしょうか。気になった方は江沢洋著「だれが原子をみたか」を読んでみることをお勧めします。

紙とペンを傍に、科学の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

機械工学科教員 木村 祐人

いいかげんなロボット:ソフトロボットが創るしなやかな未来

鈴森 康一 (著) (化学同人)

ロボコン、プロコン、エコカー…学生たちが見聞きし作る多くのモノは硬く正確であり、真面目である。社会に実装された多くのロボット達もまた真面目であり、それ故に人々の生活を支えることが出来ている。しかしながら、真面目なだけでは解決できない問題も生活の中には数多く存在している。

ゴムや布から構成されるやわらかい構造、対象を制することなく相手の動きに任せた駆動…ロボット工学の大家から繰り出されるいいかげんなロボットを見聞することが工学や研究との向き合うことの一助となれば幸いです。本書を推薦した。

機械電子工学科教員 門脇 惇

巨大建築の美と技術の粋 世界の橋

マーカス・ビニー (著) 黒輪 篤嗣 (翻訳) (河出書房新社)

本書は、人と街、文明を繋いできた世界各国の250橋が1橋1橋丁寧に紹介された図書です。橋1つ1つに建設に至る迄の背景や、建設する事の目的があります。そして、個々の橋には、固有の特徴があり、単なる構造物として存在するのではなく、建設に関わる人々の橋を架ける事への願いや多くの人々への思いが込められた橋を知る事ができる1冊だと思います。

是非、本書を手にとって、都市生活を支え、愛される橋の魅力に触れてみませんか。

建設環境工学科教員 松本 将之

学生〈高松〉

硝子の塔の殺人

知念 実希人 (著) (実業之日本社)

「これはやられた。」これは自分がこの本を読んだ後の感想である。これまで貴志祐介氏の「ミステリークロック」やこの本の作者でもある知念実希人氏の「祈りのカルテ」など様々なミステリー小説を読んできたが、この本の仕掛けは、それらとはまた一線を画すような、想像を絶するほど美しいものである。

「ミステリー小説を含む推理小説を読むときに我々はいかに犯人ばかり探そうとしているのか。」人間がいかに「常識」というものにとらわれているのか痛感させられる作品だ。これほど美しく構成された謎は今まで見たことがなく、そして今後も出てこないと思う。この作品は人類の宝であり、今我々がこの作品を手にとって読むことができるのは奇跡と言わざるを得ない。この作品を読まないという選択肢はありえない。何が何でも読むことをおすすめしたいと思う。

1年4組 (EC) 笠井 悠生樹

禍家

三津田 信三 (著) (KADOKAWA)

私が読んだ本は「禍家」と言う本です。この本はホラーとミステリーを組み合わせることによって恐ろしさと好奇心をより掻き立てる作品となっております。

主人公は、交通事故で両親を亡くし祖母と二人暮らしを始めるために新しい家に引っ越しをすところから始まり、新しい家で数々の恐ろしい体験をします。自分が体験した恐ろしい出来事について知る為、主人公は引っ越し先で仲良くなった友達と共にその地域での過去の事件や噂を調査します。やがて主人公は過去の事件を調べていくうちに自分の過去について知る事となり、自分が体験した出来事には意味があることを知ります。こうして数々の謎を解き明かして行く主人公に待つ運命はいかに…。衝撃的なラストとなっておりますので、是非興味を持った方は手にとってみてはいかがでしょうか。

機械電子工学科2年 野村 琉琥

護られなかった者たちへ

中山 七里 (著) (NHK 出版)

私が推薦する本は「護られなかった者たちへ」という本です。この本は、東日本大震災後の仙台市が舞台となっており、そこで二つの連続餓死殺人事件が起き犯人を見つけるミステリーものであり、社会福祉の生活保護問題を取り上げた社会派のミステリーで考えさせられる話です。

二つの餓死事件の裏側に隠された悲しい真実と、自分の護りたい者、護りたかった者のために人生をかけて動く登場人物に注目して読んでみてください。

機械工学科3年 多田 恵実

わかりやすい土木の実務

速水 洋志 (著) (オーム社)

本書は、土木の基礎知識から工事の種類、施工管理、法規・法律等について著している。

本書を薦める一番の理由として、建設環境工学科のどの学生が読んでも、非常に有意義な学びを得られる点である。低学年ならば、今後学年が上がるにつれてどのようなことを学ぶのかを大まかに知ることができ、高学年ならば、就職後施工管理する上で留意すべき点を大まかに知ることができるよい本である。

実務とタイトルに入っているが、将来のためにも是非読んでもらいたい一冊である。

建設環境工学科4年 土田 虎ノ助

ビブリア古書堂の事件手帖 ～栞子さんと奇妙な客人たち～

三上 延 (著) (KADOKAWA)

これは、古書店の店主で本好きの栞子さんと、本を読めない大輔が、とある事件をきっかけに出会い、様々な本にまつわる依頼を解決していく小説だ。この小説では、「少年探偵団」や「晩年」など数多くの古い本が登場する。それらの本について、栞子さんがオタク特有の早口で大輔に解説するシーンは、この小説の大きな魅力だと思っている。

本が好きで、昔の文学作品に興味がある人は、是非一度読んでみてほしい。

機械工学科4年 安田 晟吾

時給300円の死神

藤まる (著) (双葉社)

「半年間勤め上げればどんな願いも叶えてもらえる」という死神のアルバイト。同級生から誘われた主人公が、そんな非日常に入るところから物語が始まります。具体的には、この世に残る死者の未練を晴らし、あの世へと見送るアルバイト。これだけ聞くと、ホラー小説かと思われるかもしれませんが、読むと切なく、感動する物語です。

涙せずには読めない小説ですので、ぜひ読んでみてください。

電気情報工学科5年 末本 旭

教員〈読問〉

さよなら妖精

▶ 米澤 穂信 (著) (東京創元社)

今からおよそ30年前、ユーゴスラヴィアという国がありました。本作は、その国からやってきた少女マーヤが日本の高校生たちと交流し、日常の小さな謎に興味を持っていく様子を描く推理小説です。

本作は一級の青春小説であり優れたミステリであり、そして読者をユーゴスラヴィアにいざなってくれる本でもあります。本書を読んで、皆さんもユーゴスラヴィアに想像の翼を広げてみませんか？

(本書を読み終えたら、ぜひ同じ作者の「王とサーカス」「真実の10メートル手前」も読んでみてください。本書の人気キャラである太刀洗万智が主役を張っています)

一般教育科教員 中澤 拓哉

ドリームバスター

▶ 宮部 みゆき (著) (徳間書店)

意識と肉体を切り離す実験の事故が原因で、死刑囚が意識だけの存在になって、「夢」に逃げてしまうというSF作品です。

ストーリーは、その死刑囚を捕まえる賞金稼ぎの活動が中心となっています。世界観がしっかりしていることに加えて、その描写が見事なので、読むとその世界に引き込まれてしまいます。面白いと思います。

通信ネットワーク工学科教員 正本 利行

新装版 オイラーの贈物

人類の至宝 $e^{i\pi} = -1$ を学ぶ

▶ 吉田 武 (著) (東海大学出版会)

ファインマンはこの式を「これは我々の至宝である」とたたえました。この本はこの式を理解することだけを目的に書かれた本で、理解に必要な基礎的な数学についても極めて丁寧に説明されています。

この本は主婦など一般向けカルチャー講座でも講義され、参加者は数学の面白さにふれ大満足されたそうです。みなさんも時間をかけてじっくり読むことで数学やいま学んでいる専門にも改めて興味が湧くと思いますので、推薦します。

電子システム工学科教員 長岡 史郎

正解のない問題集 道徳編

▶ 池上 彰 (監修) (Gakken)

「ついてもいい嘘はある？」「努力と結果、どっちが大切？」「好き嫌いは差別と同じ？」

皆さん、こんな質問されたらすぐに答えられますか？

本書は、私たち大人でも頭を悩ませてしまうような問題が収められた問題集です。時代や地域の文化によって考え方も変わるでしょう。いくら考えても正解にたどり着かないかもしれません。知識や技術を学ぶばかりでなく、それらを正しく使えるように自ら考え、自分なりの正解を持つようにしたいとオススメする一冊です。もちろん解答集はついていません。

情報工学科教員 金澤 啓三

学生〈読問〉

明日の世界が君に優しくありますように

▶ 汐見 夏衛 (著) (スターツ出版)

私が図書館で借りた本は「明日の世界が君に優しくありますように」という本です。

この本の主人公である白瀬真波は、小さい頃にあった事故でお母さんが昏睡状態になっています。そして、事故に遭った時に母親が弟だけを庇い自分を庇ってくれなかったり、学校で仲が良かった友達に恋情のもつれから裏切られいじめられた経験から人を信じられなくなってしまいます。しかし、高校進学を機に祖父母の家に引っ越し、そこで色々な人と出会い、人の優しさに触れたことで少しずつ変わっていきます。

これから人生の中で沢山の苦しいことや辛いことがあるかもしれませんが、それでも明日を生きていかなくはなりません。自分がいま生きているのは、誰かが守ってくれたおかげだから。生きることに苦しんでいた、未来に絶望している人を読んでほしい一冊です。

情報工学科1年 石川 純

六人の嘘つきな大学生

▶ 浅倉 秋成 (著) (KADOKAWA)

この本を借りた理由は、図書館を見て回ったときに図書名が目について読んでみたいと思ったからです。この本は、就活の話で六人が最終選考に残ったところから始まる話です。スピラリンクスという会社で最終選考に残り、グループディスカッションをしてグループを作り上げるという難題をこなすストーリーです。六人それぞれ異なった性格を持ち、次々と見える裏の顔が見えていくのが見どころです。

この本を読んでみて、採用される人数が一人になったときに見せる人の見にくい部分が見えていくところがとても面白かったです。興味がある人は、是非図書館で読んでみて下さい。

電子システム工学科2年 荻田 翔一

ソロモンの偽証

▶ 宮部 みゆき (著) (新潮社)

1990年12月25日、城東第3中学校の裏庭にて、雪に埋もれた男子生徒の遺体が見つかった。この男子生徒、柏木卓也のことを、警察は飛び降り自殺と断定。事件は解決したかに見えた。

しかし、柏木は自殺したのではなく、城東第3中学きっての不良、大出俊次によって殺されたという告発状が校長の津崎、柏木の在籍するクラス2-Aの担任の森内、そして、2-Aの学級委員の藤野涼子の元に送られる。これが後に学校を揺るがす学校内裁判の幕開けとなる。

2015年に映画化され、「このミステリーがすごい」で2位にランクインした大人気作。是非お借りください。

通信ネットワーク工学科3年 安藤 凛太郎

さよならも言えないうちに

▶ 川口 俊和 (著) (サンマーク出版)

いくつかのルールをクリアすれば少しの間過去に戻ることができる喫茶店の話です。そこを訪れた人は、「現在」ではもう会うことができない、それぞれの大切な誰かに会いに行きます。会いに行く相手は、両親、兄弟、妻…と様々ですが、どの物語もとても切なく、丁寧に書かれています。過去に戻るルールのひとつに、「過去に戻っても、未来を変えることができない」というルールがあるのも、心に刺さる作品である理由の一つだと思います。

未来を変えられなくても、大切な人にもう一度会いたい、話がかきたいという純粋な人々の願いと思いに心打たれる作品です。

情報工学科3年 行成 悠

ジキルとハイド

▶ ロバート・ルイス・ステイブソン (著) 田口 俊樹 (訳) (新潮社)

「ジキルとハイド」は、現代では二重人格者や裏表の激しい人を表すのに使われており、言葉自体はほとんどの人が知っていると思います。

この本は二部構成となっており、一部は弁護士のアタソンが極悪非道な謎の犯罪者であるハイドを追いながら、善良で紳士的なジキル博士とハイドの奇妙な共通点を見つけながらハイドを追い詰めるお話。二部では、ジキル博士の手記という形でジキル博士とハイドの関係についての真実が語られます。

あまりにも有名な結末なので、残念ながらミステリーとしては楽しみ辛いですが、ジキル博士の苦しみや焦りの描写が素晴らしい、結末を知った上で読んで非常に不気味で面白い作品でした。

情報工学科4年 杵野 伊吹

教員によるエッセイ

「詫間」との出会い、そして再会

一般教育科教員 田村 昌己

「お大師さんは参るで。朝に晩に信じて拝みます。お大師さんのおかげでな、動けようやがな。人間は、普通で動けるとしたら大きな間違い（お大師さんのおかげで動ける）。神仏のおかげで動ける」

「司馬文学の頂点を示す画期作」と自他共に認める、司馬遼太郎の『空海の風景』（中公文庫）。今から20年前、正月のNHKスペシャルでその映像化が試みられた（放送はDVD化され入手可）。その中で、93歳とは思えない若々しい老婆が登場し、冒頭のセリフを力強く語るシーンがある。ナレーションによれば、彼女は詫間の港で働いているという（ちなみにこの老婆についてはNHK取材班『空海の風景』を旅する』中公文庫に詳しい紹介がある）。私は放送を見て、セリフの内容と老婆のいきいきとした姿が深く印象に残ったのと同時に、なぜか「詫間」という地名が引っかかった。その後、この放送と原作の両方を何度も何度も見返し読み返すことになるが、その度に冒頭のセリフと老婆、そして「詫間」を思い返していた。

上記の放送を見たのは高校三年生、大学受験直前の頃だった。「どうして仏教を研究しようと思ったんですか？」とは、いつも聞かれる質問だが、その出発点はちょうどその頃にある。「自分とは一体なんなのか？」「死んだらどうなるんだろう？」といった思春期特有の悩みを強く抱いていた私にとって、身近にあったのが仏教だった。祖母が四国八十八カ所参りをしており、連れられて色々なお寺を巡っていた私も自然と興味を持った。どうせなら大学で好きなことを勉強しよう。そう考えて仏教の研究ができる大学に進学し、気づけば研究者にまでなった。大学一年生の春休みには歩き遍路もした。空海も見た風景を追体験しながら、自然と向き合い、自分自身と向き合うとても有意義な旅だった。

月日は流れ放送から20年、「詫間」と突然の再会を果たす。そう、私がこの春から詫間キャンパスの教員になったのである。まさか20年前に聞いた「詫間」の地で仕事をするようになるとは思もしなかった。しかも、そのとき興味を持っていた仏教について探究を続けてきたからこそできた再会である。不思議以外の言葉が見つからない。

再会した「詫間」の地でこれからどんなことができるのか。新米教員の奮闘を見守っていただけたらありがたい。

図書委員より



読書の秋

高松キャンパス 図書委員長
機械電子工学科4年 佐藤 佑海

皆さんは普段どんな本を読んでいますか？今はちょうど読書の秋ということで、私が今お勧めする本や図書委員が学校で行っている年間行事、また図書館で利用できる内容の3つについて書いていきたいと思います。

まず1つ目は私がお勧めしている本についてです。題名は「彼女が好きなのはホモであって僕ではない」という本で、少し手に取りにくいような題名をしています。私も最初は先入観でこの本はあまり興味がないなと思っていました。しかし、友達から勧められ、読んでみると面白く、夢中で夜が明けるまで読んでいました。本を手にとるとき、どうしても先入観で選んでしまいがちですが、たまには普段読まないような本を選んだりするのも面白いですよ！

2つ目は図書委員が学校で行っている年間行事についてです。現在図書委員は年に2回ずつブックハンティングとビブリオバトルというものを行っています。詳しく説明すると、ブックハンティン

グとは学生が実際に本屋さんに行き、決められた予算の中で読みたい本を購入し、学校の図書館に追加するというものです。ビブリオバトルとは学生と教員が決められたお題の中で自分の好きな本を宣伝し、審査委員の多数決によってチャンプ本を決めるというものです。ビブリオバトルについては昨年からは始めたばかりということもあり、まだまだ参加者も少ないですが、自分のお勧めの本を発表することが出来る貴重な場のため、ぜひ皆さんも参加してみてください。

3つ目に図書館の利用できる内容についてです。この学校の図書館には勉強するスペースに加え、映画や音楽を聴くスペースもあります。内容も年々新しいのに更新されていき、飽きたりすることもありません。私もたまに利用したりしています。また、土日も開放されており、テスト期間中の勉強場所などにはもってこいの場所となっています。

最後に、私たち図書委員は普段から皆さんに面白い内容の本の情報を届けようとしています。ですので、ふと目が留まったら一瞬でもいいので読んでみてください。

読書の森

詫間キャンパス 図書委員長
情報工学科4年 瀧本 響

書名 me & she.
著者 LiLy
出版社 株式会社 幻冬舎
資料番号 076289

結婚願望が募る琴子に、姉からの「失恋したから一緒に住む」という突然の連絡。ただでさえ思い通りにならない日々而降りかかる姉という災厄。妹のことは大好きだけど、生活も恋愛も何もかも自由に生きたい真実子は、自分以外にお構いなし。常に「なんとかなるっしょ」精神で生きる姉の

真実子と、安定志向で計画魔ゆえ姉の考えが理解できない妹の琴子、会えば口を開けば喧嘩ばかりで価値観の違う姉妹二人の人生について書かれた本。各章ごとに視点が入れ替わり、姉妹喧嘩を軸に進む物語。それぞれが抱える互いへの劣等感や焦燥感、恋人や仕事に対する不満など、登場人物の心情が細かく描写されている。

人物一人ひとりの性格や行動に対する解像度が高く、「いるいる、そういう人」「その人ならやりそう、そういうこと」と、感じられるリアリティあふれる作品。普通って何か、正解な生き方はどれか悩める少女が選んだ道はどうなったのか。

専攻科生より

二つ目の専門

高松キャンパス
創造工学専攻2年 上高 正寛

皆さんは、本校で毎日専門性の高い内容を学ばれていることと思います。好きな分野や、就きたい職種として選んだ学科に属している人が大半だと思いますが、そうでない人も少なからずいると思います。私もその一人でした。今がどうかはわかりませんが、私が本校を受験した際には第4希望まで学科志望を出すことができました。当時の私は情報系の学科に進みたく、詫間キャンパスの情報工学科を第1志望としていました。しかし、私の学力では第一志望には受からず、奇跡的に受かった第3希望の建設環境工学科に進むことになりました。第2希望には電気情報工学科、第4希望には通信ネットワーク工学科を希望しており、今ではなぜ第3希望に建設環境を選んだのかはわかりません。

興味のなかった学科とはいえ、本科2年までは専門の授業も少なく、転科を目指して頑張っていました。しかし、学力おぼやらずそのまま3年を迎えました。3年からは授業の雰囲気も少し変わり、専門の内容が多くなり、少々苦しい思いをしていました。しかし、「周りと同じスタートラインである今、頑張ってみよう。」ということで授業にかじりついて聞いたり、しつこいくらいに質問をしたりしていました。すると思ったより面白く、周りに教えられるくらいの理解度と知識がついてくるようになりました。

そのまま5年まで友人と切磋琢磨しながら進んでいましたが、情報系の興味は捨てていませんでした。ちょうど本科5年の卒業研究で大きいデータを触ることが必要になり、Excelでは処理しきれないため他の処理方法を学ぶ必要が出てきました。これ幸いとプログラミングをしようと思い立ち、そこからPython入門本のコードを一冊書き写し、基礎の基礎を学びました。そこからは研究で実際にコードを書きながら、間違えて、調べて、直して、また間違えてという流れをひたすらに繰り返して訓練してきました。気が付けば、研究でディープラーニングを扱ったり、VBAで業務ツールを開発したり、VRワールドの開発をするようになり、プログラミング以外の知識も付きました。また、人に情報系の内容を教えることも増え、いつしか二つ目の専門分野として自分の中で認識できるようになりました。

振り返ってみると、二つ目の専門分野を学んだ後、一つ目の専門分野である建設に関することにも変化が現れました。思考の幅が広がったのです。二つ目が情報系であることも大きい要因ではあると思うのですが、一般化して考えると、二つの分野の結合や、他分野からの視点、他分野の考え方の応用などが自然にできるようになりました。二つ目の専門分野を学ぶということは、専門分野が単純に増えるということだけでなく、一つ目の分野にも大きな変化をもたらすことができるので、皆さんもぜひ新しい分野に挑戦してみましょ。皆さんの興味に蓋をすることはありません。好きなことをやりましょ。ちなみに最近図書館ではプログラミング、AIやディープラーニングの本が増えてきているので、この機会にぜひ読んでみてはいかがでしょうか。

本を読むことで

詫間キャンパス
電子情報通信工学専攻2年 久保 凜太郎

私はどちらかというと本を読むのが苦手です。文字を見ると眠たくなり、本を読む時間があるぐらいならゲームをする。そんな人間でした。しかし、アルバイトを始めて変わりました。周りに本がある環境でアルバイトを行うことで気になった本を手にとるようになりました。気になった本を手にとることを繰り返しているうちに次第に「本を読む」ことの良さに気付くようになりました。

私が本を読むことを避けていた理由として、インターネットを使って情報収集をした方が自分の必要としている情報がピンポイントに時間もかからず効率的に手に入れることができると思っていたからです。しかし、本からの情報収集は得られる情報の質がインターネットと比べものにならないと思います。筆者が自分に思いを伝えるために時間をかけ、何百というページによる情報凝縮は高い質の情報収集を行うならば一番効率が良いと考えを改めるようになりました。本を使い情報収集を行うことで関連した新

な気づきや知識になりました。

本を読むことで気づきたいところはまだまだあります。それは、自分の体験したことないたくさんの世界に旅行できる事です。自分が物語の主人公になったつもりで世界を救った気持ちになるのもいいと思います。また、偉人伝や有名なビジネス本やエッセイを読むことで気持ちに寄り添っていて真似してみるのもいいと思います。僕はよく勉強に詰まった時に本を読んでいろんな世界に没頭し現実逃避します。今まで一つの角度からしか考えられなかったことも様々な思いや世界に触れることでいろいろな方面から考えることができるようになり世界が広がります。帰り道にある看板に面白さを見つけられるようになるし、いままで好きじゃなかった人を好きになるかもしれません。

もしかしたら、「本を借りたらすべて読まないといけない」や「本を読む時間がない」と思っていないですか？そんなことはありません。結局読まなくてそのまま返してもいいですし、読む時間が足りなかったら延長したいとおっしゃってください。また、「ドラマやアニメを見て原作が気になるけど図書館に無いな」と思った時は購入のリクエストをしてください。少し気になった、本が目についた、本が落ちてきた、そんな本との出会いを大切にしてください。

ビブリオバトル紹介

12月15日(木)、学生の皆さんに少しでも本の魅力を感じてもらうために、図書館主催で「第3回ビブリオバトル」を開催しました。今回は、14名の学生・教職員・外来者が参加し、秋澤学生図書副委員長による司会のもと、3名の学生が一人5分間の持ち時間で「シリーズもの」をテーマにおすすめ本を紹介。

発表ごとに参加者全員によるディスカッションを行い、和やかな雰囲気の中、紹介本についての魅力を深掘りしました。

すべての発表終了後に行われた参加者全員による投票の結果、上位2名が同点となり、決戦投票の結果、機械工学科5年 柏原健矢さんの紹介による「遠国日記シリーズ」が第3代「チャンプ本」に決まりました。

<発表者と紹介本>

- ・機械工学科5年 柏原 健矢さん
「遠国日記シリーズ」
ヤマシタトモコ(著) 祥伝社 2017年
- ・電気情報工学科4年 森 なごみさん
「ガリレオシリーズ」
東野圭吾(著) 文藝春秋 1998年
- ・機械工学科3年 福岡 忠之さん
「全線全駅 鉄道の旅シリーズ」
宮脇 俊三、原田 勝正(編集)
小学館 1981年(新訂版1990年)



ブックハンティング紹介

●高松キャンパス

高松キャンパス図書館では、宮脇書店総本店(朝日新町)で、恒例のブックハンティングを6月16日(木)、11月10日(木)の2回実施しました。

参加学生は、クラス毎のグループに分かれて選書を行い、理学、工学、技術、プログラミング、語学、進学、資格取得、ビジネス、文学、歴史、趣味、料理など、様々な分野で思わぬ本の出会いがありました。

選ばれた本は図書館のブックハンティングコーナーに展示しています。皆様ぜひとも図書館にお越しください。きっと新しい発見があります。

※こんな本が選ばれました。

6月16日(全91冊)

- ・サクッとわかるビジネス教養 地政学
- ・やってはいけないデザイン
- ・ちいさい世界(もの)づくり
- ・一冊でわかるロシア史
- ・猫の恋
- ・アルゴリズム ビジュアル大辞典

- ・贈りたくなるスイーツ
- ・夜に駆ける
- ・掟上今日子の忍法帖
- ・Webデザインの現場で使えるVue.jsの教科書
- ・ゼロからのTOEIC L&Rテスト600点全パート講義
- ・魔女の旅々17,18

11月10日(全89冊)

- ・バフェットのマネーマインド
- ・GitHub実践生命
- ・CIM入門
- ・ゼロからわかる機械力学入門
- ・笹原大の艦船模型ナノ・テクノロジー工廠
- ・発達障害「グレーゾーン」その正しい理解と克服法
- ・料理家の母から教わった 定番料理のおいしいコツ
- ・人類最強の純愛
- ・ようこそ実力至上主義の教室へ6,7,8
- ・祈りのカルテ 再開のセラピー
- ・Magentaで開発AI作曲



●詫間キャンパス

詫間キャンパス図書館では11月7日(月)に、宮脇書店本店(高松市丸亀町)でブックハンティングを実施しました。11月にしては暖かな月曜日に、5年生を中心に1年生から専攻科生までの8名が参加しました。今回は、選ばれることの多い専門書・小説・ベストセラー本以外の分野(人文・社会科学系等)にも目を向けてブックハンティングをしてもらいました。各人予算を一杯使い、全体で約1時間半かけて46冊ほどの本を選びました。書店の中から皆思い思いに選び出してきた本は、購入しようと狙っていた本から、書棚の隅こから掘り出してきたような本まで様々です。

選書された図書の内、既に購入済みだった図書を除いた約40冊を受け入れて、新着図書コーナーに展示していますので、図書館に来て、ぜひ手にとって見て下さい。タイトルを眺めるだけでも楽しいと思います。



※こんな本が選ばれました。

- ・教場X
- ・ホワイトハッカーの本
- ・思考法図鑑
- ・探偵はもう、死んでいる
- ・一緒にいると楽しい人、疲れる人
- ・「ムダ」の省き方
- ・いまさらですがソ連邦

図書館からのお知らせ

1. 両キャンパス間の相互貸出をおこなっていません。読みたい本が図書館にない時等は気軽にカウンターへ声をかけてください。
2. 本、CD、DVDの購入リクエスト、貸出中の資料の貸出予約も常時受け付けています。

3. 蔵書検索はこちら

読み取れない場合は、
<https://libopac-c.kosen-k.go.jp/webopac41/cattab.do> にアクセスするか、
高専ホームページ
メニュー「施設案内」→「図書館」→「蔵書検索」をクリックしてください。



図書館閲覧室の開館時間

平日 8:30～20:00
(長期休業中は17:00まで)
土日 10:00～16:30
(長期休業中以外)

※詳細は図書館(開館)カレンダーをご確認ください。
※自然災害等により臨時閉館する場合があります。

一般利用者(保護者)の皆様へ

本校の図書館は、一般の方へも開放しており、貸出(予約)も可能です。理工系図書が中心ですが、香川県郷土資料や教養・実用・娯楽の図書、雑誌も多数取り揃えていますので、是非ご利用ください。

なお、学校行事等で開館日が変更することがありますので、来館される場合は、香川高等専門学校ホームページ(メニュー「施設案内」→「図書館」)に掲載している図書館カレンダー及び図書館利用案内を確認してからお越しください。